

## 聴覚障害児のための宇宙教育プラン

長崎短期大学 小嶋栄子、さくら研究所 中村輝子

### Plan of Space Education for Deaf children

Eiko KOJIMA<sup>1</sup> and Teruko NAKAMURA<sup>2</sup>

<sup>1</sup> English Department, Nagasaki Junior College, 600 Shiinoki-cho, Sasebo, Nagasaki, 858-0925

<sup>2</sup> Institute of SAKURA Science, 36-1, Minamidaira 4-chome, Hino, Tokyo, 191-0041

**Abstract:** The proposed UN Disability Convention advocate education as a human right for people with disabilities and WFD supports the position. So we appeal that like all children, all Deaf children can get a quality space education using sign language as their mother tongue.

現在、国連（UN）は「障害者の権利条約」を策定中であり、その「第24条 教育」の冒頭において、締約国は、教育についての障害のある人の権利を認める。」として、教育を受ける権利の差別撤廃と機会均等、及び聴覚障害者の母語とも言える手話習得の促進を容易にすることなどを謳っている。

さらに、その条約に向けて世界ろう連盟（WFD）<sup>※</sup>は「ろう児の教育的権利に関するWFDの方針」を発表し、「ろう児は、全ての学習者と同じように、教育を受ける権利、そして質の高い教育に完全なアクセスを持つ権利を有している。」と宣言し、手話についても、聴覚障害児がそれぞれの国の手話を使う権利を主張している。

本プランの目的は、以上のような国連障害者の権利条約及びWFD宣言の精神に則り、宇宙教育についても同様であるとの立場から、聴覚障害児の第一言語である手話を通じて、さまざまな宇宙の知識を、彼らの教育に取り入れていく計画の必要性を提案することである。我々はこのプランの推進によって、たとえば、聴覚障害によって狭められていた職業選択の幅<sup>1)</sup>が広がるなど、彼らの人生観の変革にも寄与することを願っている。

手話は単なるコミュニケーション手段ではなく、日本語や英語と同じように一つの独立した言語であり<sup>2)</sup>、聴覚障害児にとっては第一言語（母語）である。

そこで、聴覚障害児のための宇宙教育プランを考えるにあたっては、手話によってそれを行うことを前提として考えていかなければならない。ところが、現状の学校教育において宇宙に関する手話は、「天体」という分類の中でわずかに57例が挙げられているにすぎない<sup>3)</sup>（宇宙・天文・天球・地球・星・人工衛星・光年・ビッグバン……。その中の一つ「宇宙」という手話を右に示す。）

基本的な宇宙教育を施すためには、「重力・無重力・宇宙飛行士・宇宙ステーション・船外活動・スペースシャトル」などの手話が必要であると考えられるが、現在この中でスペースシャトル（右下）以

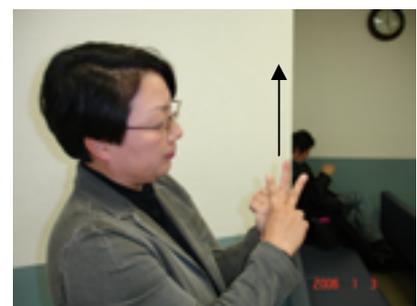
外の正式な日本手話は存在しない。

したがって将来、国際宇宙ステーションから健常児に対して行われるであろう教育と同じように、聴覚障害児に対して施していく宇宙教育の第一歩として、ここに宇宙に関する手話の充実を提案する。

#### 【宇宙】



#### 【スペースシャトル】



#### 【参考文献】

- 1) 日本の聴覚障害教育構想プロジェクト委員会 2005『日本の聴覚障害教育構想 プロジェクト最終報告書』（財）全日本ろうあ連盟
- 2) 金、高田ら 2004「特集障害者権利条約の動向—手話の位置づけ」『手話コミュニケーション研究』No. 54, 2004. 12、日本手話研究所
- 3) ろう教育の明日を考える連絡協議会『学校の手話』作成委員会 2005『学校の手話シリーズ3 理科の手話用例集』（財）全日本ろうあ連盟

※世界ろう連盟(WFD) は、8つの地域事務局の下に125ヶ国のろう者組織及び多くの関連組織を持つ国際非政府組織であり、国連に諮問資格を持つ。